



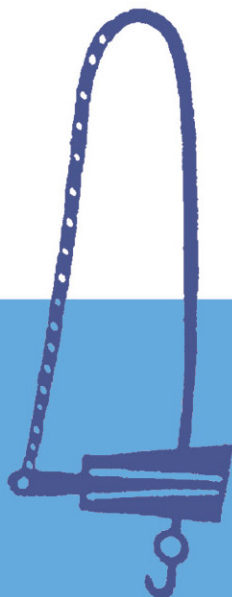
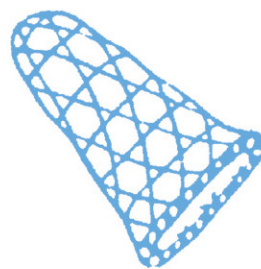
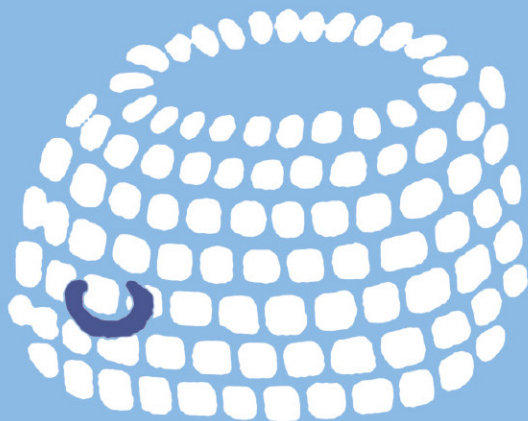
神奈川大学

日本常民文化研究所

2018—2020



INSTITUTE FOR THE STUDY
OF JAPANESE FOLK CULTURE



日本常民文化研究所	1
組織	
活動の概要	2
他機関との連携	3
所員紹介	4
沿革	6
調査と研究	7
所蔵資料・図書	12
所蔵資料	
所蔵資料検索	14
所蔵図書	15
刊行物	16
歴史と民俗	
民具マンスリー	17
叢書・報告書・目録ほか	18
展示	20
講座	22
常民文化研究講座	
古文書修復実習	
民具を語る	
国際常民文化研究機構	23
利用案内	25

【表紙】昭和10年代のアチック・ミュージアムにおいて、民具蒐集のお礼品として作成された「アチック手拭」の図柄(図案／藤木喜久磨)。

最新情報は研究所Webサイトへ

- 本誌掲載の情報は、2018年6月時点のものです。最新の情報は研究所Webサイトにて随時掲載しています。「神奈川大学デジタルアーカイブ」では所蔵資料の検索が可能です。
- また、本研究所の1年間の研究活動報告をまとめた『神奈川大学日本常民文化研究所年報』も合わせてご覧ください。

神奈川大学日本常民文化研究所Webサイト
<http://jominken.kanagawa-u.ac.jp/>

神奈川大学デジタルアーカイブ
<http://kdarchive.kanagawa-u.ac.jp/archive/>

ご挨拶

共同研究の実りを求めて

1921年に渋沢敬三によって設立された“アチックミュージアムソサエティ”は、渋沢が横浜正金銀行ロンドン支店へ赴任したため一時中断されますが、帰国後の1925年、「アチック・ミュージアム」として再開され、戦時中には名称が日本常民文化研究所と変わりました。名称は変わっても、渋沢は一貫して民具・民俗資料および漁業・水産史関連の資料収集と研究を進め、戦後も日本常民社会の資料収集とその解明に尽くしました。そして、1982年、日本常民文化研究所は縁あって神奈川大学に招致され、現在は神奈川大学日本常民文化研究所として存続してきました。

ところで、研究という世界は、ほっておくとより細分化され、より先鋭化される傾向があります。そのため、研究が進めば進むほど、その研究は専門家以外理解できないものとなりがちで、人々の関心とは別世界のものになってしまう危険性があります。

そうした研究も時と場合には必要なこともあります。渋沢は自ら時間を割いて研究を進めた経験から、志を同じくした専門の異なる研究者たちとの共同研究に重要な意義を見出し、昭和10年から開始された『アチック マンスリー』第1号に、次のように述べています。

何を自分はアチックに見出さんとしつつあるか。人格的に平等にして而も職業に専攻に性格に相異つた人々の力が仲良き一群として働く時その総和が数学的以上の価値を示す喜びを皆で共に味ひ度い。チームワークのハーモニアスデヴェロップメントだ。

渋沢が資料収集の重要性とともに研究の有り様として、専門の異なる人々による共同研究とその成果に研究姿勢の理想を見ていることが分かります。すなわち、渋沢の求めた常民文化の研究とは、科学性を重視するなかでの細分化を止め、真逆の総合化することを求めているように思えるのです。それは、まさに常民の生活や社会を読み解き、時には再現していく方法として複眼的思考や価値観を必要としていることを意味しているように感じられるのです。こうした渋沢の求めた研究姿勢も、今、改めて受け継いでいくことが大切かと考えています。神奈川大学日本常民文化研究所は、いつでも世界に向かって開かれています。我々と志を共にする方々は、どうぞお出でください。また、多くの方々のご理解と研究活動のご支持もよろしくお願い申し上げます。

神奈川大学日本常民文化研究所
所長 内田青蔵

日本常民文化研究所

Institute for the Study of Japanese Folk Culture



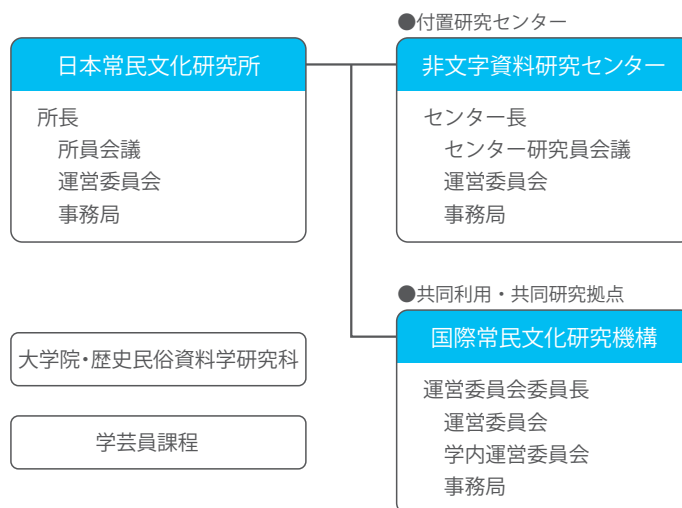
- ❖ 日本常民文化研究所は、日本民衆の生活・文化・歴史を調査分析する研究センターとして先駆的活動を展開してきました。1921年、渋沢敬三により“アチックミュージアムソサエティ”として創設されて以来、研究所の活動は民具の収集・分類、古文書の収集・整理、漁業史研究など、日本常民社会の実に多様な領域を対象としてきました。1982年に神奈川大学の付属研究所となり、現在も、歴史と民俗文化の学際的共同研究機関として事業を続けています。また、開かれた研究所として、学外の研究者にも研究交流の機会を提供すると同時に、これらの諸分野に関わる教育活動も行っています。

渋沢敬三と アチック・ミュージアム



渋沢敬三(1896―1963)は、実業家である渋沢栄一の孫であり第16代日本銀行総裁、幣原内閣大蔵大臣を務めました。1921年に物置小屋の屋根裏に「アチック・ミュージアム(屋根裏博物館)」をつくり、玩具、民具などの収集・展示を開始。その後、多くの同人や研究員により民具研究、地域研究、水産史研究などの分野も推し進められ、敬三が提唱した「ハーモニアスデヴェロップメント」の精神を受け継ぎ、現在では本研究所にて活動が継続されています。

組織



所員

(2018年6月現在)

- ◎ 内田青蔵
- 大川 啓
- 小熊 誠
- 昆 政明
- 佐野賢治
- 後田多敦
- 須崎文代
- 関口博巨
- 泉水英計
- 高城 玲
- 平井 誠
- 廣田律子
- 前田禎彦
- 安田常雄
- 安室 知

※◎所長 ○運営委員

大学院・学芸員課程への協力

● 大学院歴史民俗資料学研究科

神奈川大学では歴史・民俗資料学の研究者を養成するために、1993年に本研究所を母体とする独立大学院「歴史民俗資料学研究科」、1995年に博士後期課程を開設しました。教育・研究活動は本研究所および非文字資料研究センターと密接に連携して行われ、学生は研究会や資料調査への参加の機会も多く、所蔵資料等の利用が可能です。

● 学芸員課程

本研究所は、1985年より神奈川大学に開設された学芸員課程に協力しています。資料の収集、整理、調査研究、展示に関する基礎実習を基盤に、博物館実習により民具および文献資料(古文書)を扱う学芸員の養成を目指します。学内の学生のみならず、すでに博物館、資料館などで勤務する方々にも聴講を認めています。

1. 研究成果の公開



第21回 常民文化研究講座(2017年12月)

所員を中心とした調査研究の成果は、各種刊行物(論集・叢書・調査目録・調査報告等)・講座・研究会ほかのかたちで、広く公開しています。Web サイトでも各種データベースや新しい情報などを随時公開しています。

2. 資料の収集と研究・公開

フィールド調査において調査対象とした資史料を撮影等の手段によって収集し、必要に応じて整理・目録化を行っています。資料所蔵者の方々



史料撮影(島本町立歴史文化資料館/2017年8月)

のご理解・ご協力のもとに、当該資料を確実に後世に伝え、将来の研究において有効に活用するための基盤を作る作業です。また、研究所で所蔵・管理している資料群の整理・分析も順次進めています。

3. 研究会活動



第113回日本常民文化研究所研究会(2017年6月)

1983年以来、所員相互の検証・批判を経た研究成果を共有するための場として、公開研究会を開催しています。所員・研究員のほか、所外の研究者にも報告を依頼し、研究水準の向上を図っています。年数回、公開の形で実施しており、開催回数は116回(2018年6月現在)となりました。

4. 非文字資料研究センター

神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の5年間の研究事業を継承・発展させる組織として神奈川大学日本常民文化研究所に付置されました。文字以外の人間諸活動の表現形態を対象に調査研究、資料収集の実施、世界への発信を目的としています。



「滅私奉公」戦意高揚紙芝居コレクション
(非文字資料研究センター所蔵)

5. 国際常民文化研究機構



共同研究(一般)民具の機能分析に関する基礎的研究
(砺波民具展示室調査/2017年9月)

本研究所を母体とした、文部科学省認定の共同利用・共同研究拠点です。グローバル化のなかにあって、等身大の生活文化を総合的に調査・研究・分析する方法論の確立を目指し多文化共生の道を探ります。本研究所の所蔵する史資料とデータベースを広く学外の研究者に公開・共有化し、さらに研究分野を拡大、深化させるために、共同で学際的な研究を進めています。※詳細は23ページをご覧ください。

他機関との連携

さまざまな地域・分野の諸機関と連携した調査研究も、本研究所の重要な活動となっています。

また、海外の研究機関とも常民文化研究の相互理解と交流を深めるために、学術交流を行っています。

近年の主な連携機関・事業

横浜市歴史博物館

神奈川県と同じ横浜市内にある博物館として、さまざまな事業での相互協力を行っています。2002年の「屋根裏の博物館―実業家渋沢敬三が育てた民の学問」、2017年に「和船と海運―江戸時代横浜の船路と和船のしくみ」などの特別展を共催しています。



「和船と海運」横浜市歴史博物館会場
(本学貸出資料 和船模型／2017年1月)

輪島市教育委員会

2012年より輪島市教育委員会からの受託研究として角海家の襖下張文書調査や民具の調査を行ってきました。そのほか、所員による講演など、さまざまな形で協力関係が継続されています。

三宅村教育委員会

2016年より三宅村からの受託研究として、三宅村郷土資料の調査、公開、保存に関わる事業を進めるために調査、整理作業、三宅島郷土資料館の資料目録の作成を進めています。また、三宅村の生業（農業・漁業・その他）にかかわられている方々に実施した聞き書き調査の結果をオーラルヒストリーとしてまとめ、冊子を刊行しています。



三宅島郷土資料館所蔵資料

水産研究・教育機構中央水産研究所



和歌山県海南市下津町に保管されている資料

1949年～54年度に実施された「漁業制度資料調査保存事業」により収集された古文書等の再整理作業を、2001年度より水産総合研究センター(2016年度より水産研究・教育機構に変更)からの受託研究として実施しています。これまで10冊の『水産総合研究センター所蔵古文書目録』と2冊の概要目録を刊行しています。

日本民具学会

同学会は、財団法人日本常民文化研究所が開催していた民具研究講座の活動の中から1976年に設立され、相互に協力しながら民具研究を推進してきました。2005年度からは本研究所内に学会事務局がおかれています。

学術交流

学術交流協定

本研究所では下記の研究機関と学術交流協定を締結し、シンポジウムや研究会、講演会などへの招聘や派遣、研究成果および研究動向などの情報交換、調査研究協力などを行い、交流を促進することにより国際的なネットワークを形成しています。



国立台湾海洋大学海洋文化研究所との調印式
(2017年6月)

- 国立台湾海洋大学海洋文化研究所 2017年6月28日
- 浙江海洋大学中国海洋文化研究中心 2016年5月25日
- 韓国中央大学校韓国文化遺産研究所 2012年7月14日
- サンパウロ大学日本文化研究所 2012年4月1日
- 韓国国立木浦大学校島嶼文化研究院・島の人文学研究団 2011年4月1日
- 慶北大学校嶺南文化研究院 2009年12月28日
- 釜慶大学校海洋文化研究所 2009年12月25日
- 中国海洋大学海洋文化研究所 2009年11月24日
- 上海海洋大学経済管理学院・海洋経済文化研究センター 2009年11月20日

東アジア島嶼海洋文化フォーラム



第5回東アジア島嶼海洋文化フォーラム
「海洋文化の多様性」
(愛媛県松山市／2017年12月)

2012年度より韓国・中国・日本の海洋文化に関する研究機関が中心となり発足した「東アジア島嶼海洋文化フォーラム」は、2013年度から各参加校が主催となって毎年開催され、海洋文化に関わる重要な国際的な討論の場となっています。2017年

度には、愛媛県松山市にて神奈川県国際常民文化研究機構／日本常民文化研究所主催で第5回のフォーラムが、「海洋文化の多様性」をテーマとして開催されました。

五大学研究所連合

日本の民俗学の形成にそれぞれの立場から大きな足跡を残した民俗学の三先達、柳田國男・折口信夫・渋沢敬三の学問と思想を踏まえ、その意志の継承と発展、実践を志向する成城大学民俗学研究所、國學院大學折口博士記念古代研究所、神奈川大学日本常民文化研究所と愛知大学総合郷土研究所、南山大学人類学研究所が、2008年度より民俗学の今日的な意味をさまざまな角度から捉える共同の研究会を行っています。

内田青蔵 UCHIDA Seizo

[所属] 神奈川大学工学部 教授

[専門分野] 近代日本建築史 近代日本住宅史

[研究業績]

1. 「漢口の旧日本租界地の建築について」『非文字資料研究』第14号 2017年
2. 「擬洋風建築としての演説館について」『近代日本研究』第33巻 慶應義塾福澤研究センター 2017年
3. 『日本の近代住宅』SD266 鹿島出版会 2016年

大川 啓 OKAWA Hiromu

[所属] 神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 准教授

[専門分野] 日本近現代史

[研究業績]

1. 「近代日本の地域福祉と米価騰貴」『歴史評論』806号 歴史科学協議会 2017年
2. 「近代日本における名望と地域福祉の社会史」『歴史学研究』929号 歴史学研究会 2015年
3. 「明治期の都市火災と地域社会」『史苑』73巻2号 立教大学史学会 2013年

小熊 誠 OGUMA Makoto

[所属] 神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 教授

[専門分野] 民俗学

[研究業績]

1. 「『つながり』を創る沖縄の系譜」『アジア遊学』勉誠出版 2017年
2. 編著『＜境界＞を越える沖縄』森話社 2016年
3. 「“間”の民俗—養子制度から沖縄の門中を再検討する—」『歴史と民俗』30 平凡社 2014年

昆 政明 KON Masaaki

[所属] 神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 特任教授

[専門分野] 民俗学 船舶史

[研究業績]

1. 「北日本における伝統的木造漁船の船体構造の変遷過程」『国際常民文化研究叢書5—環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究—』 2014年
2. 「艀・櫂の操作と絵画表現」『国際シンポジウム報告書Ⅱ』“モノ”語り—民具・物質文化からみる人類文化— 2011年
3. 「津軽海峡及び周辺地域のムダマハギ型漁船について」『民具研究』118 日本民具学会 1998年

佐野賢治 SANO Kenji

[所属] 神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 教授

[専門分野] 民俗学

[研究業績]

1. 『宝は田から—“しあわせ”の農村民俗誌 山形県米沢—』 春風社 2016年
2. 『ヒトから人へ—“一人前”への民俗学—』 春風社 2011年
3. 『虚空蔵菩薩信仰の研究—日本的仏教受容と仏教民俗学—』 吉川弘文館 1996年

後田多敦 SHIITADA Atsushi

[所属] 神奈川大学外国語学部 准教授

[専門分野] 日本近代史 琉球史

[研究業績]

1. 「『海邦小国』をめざして—「史軸」批評による沖縄「現在史」」 出版舎Mugen 2016年
2. 『琉球救国運動—抗日の思想と行動』 出版舎Mugen 2010年
3. 『琉球の国家祭祀制度—その変容・解体過程』 出版舎Mugen 2009年

須崎文代 SUZAKI Fumiyo

[所属] 神奈川大学工学部 特別助教

[専門分野] 近代住宅史 台所史 近代建築史

[研究業績]

1. 「『茨城県映画』にみる 1950～1960年代の農村住宅の台所改善—映像を史料とした台所の変容に関する研究」『技術と文明』別号(電子版) 日本産業技術史学会 2018年
2. 「大正期から昭和初期における共同炊事場の展開と建築的特徴—栄養学に基づく佐伯矩の取り組みに着目して」『生活文化史』第71号 日本生活文化史学会 2017年
3. 共著「台所における立働式導入と調理設備の作業面の高さについて—明治・大正・昭和初期の検定済高等女学校用家事教科書にみる日本の台所の近代化に関する研究—」『日本建築学会計画系論文集』第78巻第694号 日本建築学会 2013年

関口博巨 SEKIGUCHI Hiroo

[所属] 神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 准教授

[専門分野] 日本近世史 古文書修復

[研究業績]

1. 「山梨」『東日本の部落史』Ⅱ 現代書館 2018年
2. 「伊予二神島の近世—瀬戸内海における「島村」の形成—」『論集 瀬戸内海の歴史民俗』2016年
3. 「近世甲斐の地札と証文—古文書・民具・調査小考—」『民具マンスリー』第47巻4号 2014年

泉水英計 SENSUI Hidekazu

[所属] 神奈川大学経営学部 教授

[専門分野] 社会人類学

[研究業績]

1. 「サイパン戦秘史にみる人種差別とナショナリズム」『帝国とナショナリズムの言説空間』御茶の水書房 2018年
2. “History As a Mirror of Self: A Note on Postwar Okinawan Historiography,” *Rethinking Postwar Okinawa: Beyond American Occupation*, Lexington Books, 2017.
3. 「アメリカ人地理学者による冷戦期東アジアのフィールド調査」『帝国を調べる—植民地フィールドワークの科学史』勁草書房 2016年

高城 玲 TAKAGI Ryo

[所属] 神奈川大学経営学部 教授

[専門分野] 文化人類学 東南アジア(タイ)研究

[研究業績]

1. 『秩序のミクロロジー—タイ農村における相互行為の民族誌』神奈川大学出版会 2014年
2. 共編『DVDブック 甦る民俗映像—渋谷敏三と宮本馨太郎が撮った1930年代の日本・アジア』岩波書店 2016年
3. 「分断される国家と声でつながるコミュニティタイにおける政治的対立と地方コミュニティラジオ局」『帝国とナショナリズムの言説空間』御茶の水書房 2018年

平井 誠 HIRAI Makoto

[所属] 神奈川大学人間科学部 教授

[専門分野] 人文地理学 地誌学

[研究業績]

1. 「高齢人口移動」『首都圏の高齢化』人口学ライブラリー14 原書房 2014年
2. 「高齢人口の分布と移動」『地域と人口からみる日本の姿』古今書院 2011年
3. 「高齢者による都道府県間移動の地域性」『人口減少と地域—地理学的アプローチ』京都大学学術出版会 2007年

廣田律子 HIROTA Ritsuko

[所属] 神奈川大学経営学部 教授

[専門分野] 中国祭祀儀礼 中国祭祀芸能 中国民俗学

[研究業績]

1. 編著『ミエン・ヤオの歌謡と儀礼』大学教育出版 2016年
2. 『中国民間祭祀芸能の研究』風響社 2011年
3. 『鬼の来た道』玉川大学出版部 1997年、『鬼の来路』(中文) 中華書局 2005年

前田禎彦 MAEDA Yoshihiko

[所属] 神奈川大学外国語学部 教授

[専門分野] 日本古代史

[研究業績]

1. 「解題『二神司朗家文書 中世文書・系図編』」『二神司朗家文書 中世文書・系図編』 2016年
2. 「古代の裁判と秩序」『岩波講座日本歴史5 古代5』岩波書店 2015年
3. 「小舎人童考—平安時代の王族・貴族の従者」『人文研究』神奈川大学人文学会 2015年

安田常雄 YASUDA Tsuneo

[所属] 神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 特任教授

[専門分野] 日本近現代史 オーラルヒストリー

[研究業績]

1. 編著『国策紙芝居からみる日本の戦争』勉誠出版 2018年
2. 共編著『東アジアの知識人』全5巻 有志舎 2013-14年
3. 編著『シリーズ戦後日本社会の歴史』全4巻 岩波書店 2012-13年

安室 知 YASUMURO Satoru

[所属] 神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 教授

[専門分野] 民俗学(生業論 環境論) 物質文化論

[研究業績]

1. 『自然観の民俗学—生活世界の分類と命名』慶友社 2016年
2. 『田んぼの不思議』小峰書店 2013年
3. 『日本民俗生業論』慶友社 2012年

● 2018年6月時点の情報です。

所員・客員研究員・特別研究員の最新情報は研究所 Web サイトをご覧ください。



沿革

日本常民文化研究所の前身であるアチックミュージアムソサエティは1921年の創立。渋沢敬三が学友達と自邸の一角に開設した、屋根裏部屋の小さな博物館がはじまりです。以後、民具・民俗研究、水産史研究に活動の幅を広げ、資料・記録・索引等の編纂・刊行にも努めました。戦時下に「日本常民文化研究所」へと改称、戦後は財団法人として再出発し、水産資料の収集・整備に力を注ぎ、また『民具マンスリー』刊行を軸とした民具研究の情報センターとしての機能も果たすようになりました。

神奈川大学付置研究所となった以降も、これまでの資料群と調査・研究方法等をもとに新たな調査領域を開拓しつつ、海を中心にした日本の歴史・民俗・文化の研究に貴重な成果をあげて今日に至っています。詳細は研究所 Web サイトをご覧ください。



アチック・ミュージアムで民具を付けた同人 目録番号：ア-78-12

1921	大正10年	渋沢敬三が、友人たちとともにアチックミュージアムソサエティをつくり、自邸の物置に生物の標本、郷土玩具等の民具を集め、標本室とした。
1925	大正14年	アチック復興第1回例会を開き、名をアチック・ミュージアム(屋根裏博物館)とする。
1935	昭和10年頃	研究所の形も整い、第一部会(毎週土曜日の研究会)、第二部会(民具研究会)、漁業史研究室、内浦史料編纂等が軌道にのった。
1936	昭和11年	保谷に民族学協会附属博物館開設を建議。アチック蒐集民具を挙げて寄贈。
1942	昭和17年	アチック・ミュージアムを日本常民文化研究所と改称。
1949	昭和24年	水産庁より水産資料の調査保存の委託があり、東京月島の東海区水産研究所におかれた分室(月島分室)にて、漁業資料の調査・蒐集・目録作成・筆写などがすすめられた。
1950	昭和25年	財団法人日本常民文化研究所となる。
1955	昭和30年	月島分室閉鎖。
1963	昭和38年	10月、渋沢敬三死去。
1964	昭和39年	角川書店から『日本絵巻物全集』の付録として『絵巻物による日本常民生活絵引』(全五巻)が順次出版される。
1968	昭和43年	『民具マンスリー』創刊。
1972	昭和47年	東京三田、二の橋のマンションに移る。
1981	昭和56年	神奈川大学内に招致委員会設置、7月神奈川大学日本常民文化研究所設立。
1982	昭和57年	3月31日、財団法人日本常民文化研究所は解散。愛媛県二神家などの史料調査を開始。
1984	昭和59年	石川県輪島市時国家等の調査を開始。
1986	昭和61年	『歴史と民俗』(神奈川大学日本常民文化研究所論集)創刊。
1992	平成4年	本研究所を母体とする大学院歴史民俗資料学研究科の開設認可。
2002	平成16年	常民参考室の開室。企画展「絵巻物から“辞書をつくる”—日本常民生活絵引の世界」開催。
2003	平成15年	本研究所等を基礎とした「人類文化研究のための非文字資料の体系化」が21世紀COEプログラムに採択される。
2008	平成20年	COEプログラムの成果を継承し発展させるために非文字資料研究センターが付置される。
2009	平成21年	本研究所を基盤とした共同利用・共同研究拠点として「国際常民文化研究機構」が発足する。
2011	平成23年	東日本大震災で被災した気仙沼大島漁業協同組合資料の搬出保全を本研究所と大学院歴史民俗資料学研究科と合同で実施。
2013	平成25年	3月、3号館に新設された神奈川大学展示ホールに神奈川大学日本常民文化研究所展示室を開室。常設展と第1回企画展「近藤友一郎 和船模型の世界」開催。
2014	平成26年	国際常民文化研究機構が共同利用・共同研究拠点として再認定される。 (期間:平成26年4月1日～平成32年3月31日)
2016	平成28年	気仙沼大島漁協文庫の落成式



アチックミュージアムで作成された収集資料の原簿「おもちゃ箱原簿」(研究所蔵)



1939年に東京・保谷に開館した日本民族学会附属博物館(荻嘉一郎氏保管資料)



企画展「近藤友一郎 和船模型の世界」

調査と研究

Research and Study

- ❖ 本研究所の研究活動は、単なる机上の分析に留まらず、現地調査・フィールドワークを踏まえた研究・分析であるところに特徴があります。
- ❖ 財団法人時代の研究方針は、文献史料(古文書)・有形資料(民具)の調査・収集を行い、漁業史研究と民具研究を中心とした常民文化の研究を進めることでした。神奈川大学付属機関となって以後も、基本的にはその方針を受け継ぎ、関連研究の発展に努め、また研究分野を次第に拡大しています。

研究の主な内容

地域の総合的研究

「地域」とは、地理・気候・植生などの自然条件によって区画される空間のことです。またそれは、自然からさまざまなものを受け取り、また自然にいろいろな形ではたらきかけている人間が、人間同士の関係を多様に結びあいながら生活し、歴史や文化を形成していく場でもあります。

そういう「地域」を総体として把握し、それを歴史や文化研究の基礎とする必要があります。本研究所では、農山漁村を中心とする諸地域の総合調査を実施しています。地域の総合研究では、その多様な姿を明らかにするため、専門分野の異なる研究者が共同することが必要です。現在スタッフがいない研究分野については、研究所外の研究者の協力をえながら研究を進めています。

また、地域在住の研究者との協力関係も含め、研究・調査結果の共有関係を作り、その地域の人々が自分たちの属する地域についての理解を深めることにも寄与しよう努めています。



共同研究「二神家・二神島の歴史・民俗研究」では愛媛県松山市二神島を調査地域としている

漁業史研究

財団法人時代に収集された資料を活用し、さらに本学招致後に実施された調査を基礎にして研究が行われています。漁業・漁村の調査に際しては、文献史料だけでなく、漁具・漁業技術・造船技術等の収集を含めた総合調査を実施しています。これらの成果は、史料目録・史料集・調査報告等にまとめ、随時公開しています。

民具研究

『民具マンスリー』(月1回発行)の編集・刊行の基礎となる調査研究活動を推進しています。その際、地域史との関連を特に重視し、全国的に活発化しつつある民具研究の拠点として、その指標となるような研究を進めています。

資料管理に関する研究

古文書や民具は、それ自体としては「もの」であるにすぎません。それを歴史や文化を語らせるための資料とするためには、きちんとした方針のもとに整理し、記録し、保存しなければなりません。本研究所では、修復・保存の技術的問題も含めて、資料管理に関する全般的問題を検討しています。

アチック・ミュージアムおよび 常民研の活動状況に関する研究

1925年以来のアチック・ミュージアムおよび日本常民文化研究所の活動は、民俗学、民族学、民具研究、漁業史研究などの学問形成に深く関与しており、研究所の歴史そのものが研究対象といえます。こうした観点から、引き継いだ諸資料のほか各地に分散している関係資料の調査、研究を進めています。

期間：2016年～ 代表者：泉水英計

〔調査地域〕常民研所蔵の民族学振興会資料、アチック写真・フィルムが発生した過去の調査活動の対象となった地域

〔研究目的〕

常民研が所蔵する民族学振興会資料とアチック写真・フィルムを主な基礎資料とし、研究会と共同調査(個人調査)を行う。具体的には、これらの資料が発生した過去の調査活動の対象となった地域で追跡調査を行い、関連情報を収集するとともに、資料を共有または分有する諸機関(宮本記念財団・渋沢史料館・国立民族学博物館)との連携の下で資料の有効活用を進め、本邦における民俗学、民族学・文化人類学、農村社会学、地理学、地域研究といったフィールド・サイエンスの展開について新しい歴史像を提示することを目指す。

各所員が学問分野、対象地域のいずれかの専門に応じて適宜現地調査を行い、順次、この作業を通じて関連するデータを統合的に整理し、他機関の研究者にも利用可能な文化資源として提供することが期待される。

▶タイ国チェンマイ県サンバートゥング村にて。日本民族学協会による東南アジア稲作民族文化総合調査団が1957年に撮影した写真を使った追跡調査(2017年3月)



◀知里真志保『分類アイヌ語辞典』。第一巻「植物篇」(日本常民文化研究所集報第64号、1953年)、第二巻「動物篇」(同第87号、1962年)、第三巻「人間篇」(同第68号、1954年)。民族学振興会時代の保谷民博にはアイヌ住居(チセ)展示も建てられた(「アイヌ住居に関する若干の考察」『民族学研究』14巻4号)



▶岩手県八幡平市博物館にて資料調査。アチック同人による齋藤家訪問から、イエ・ムラ論の画期となる有賀喜左衛門『南部二戸郡石神村に於ける大家族制度と名子制度』(アチック・ミュージアム集報第43号、1939年)が生まれた。齋藤家文書からは、その後も有賀が齋藤家の調査を継続的に進めていたことがわかる(2017年1月)



◀公開研究会では個別地域のフィールド調査の歴史について地域研究専門家から学ぶ(写真は小長谷有紀「モンゴルに関するフィールド・サイエンスの黎明期—みんばく梅棹資料から探る」2018年1月)

共同研究 **二神家・二神島の歴史・民俗研究**

期間：2016年～ 代表者：前田禎彦

〔調査地域〕愛媛県松山市二神島

〔研究目的〕

従来、常民研が継続してきた二神島の歴史・民俗研究の新たな展開を図る。

1. 松山市粟井地区の二神家関連資料を調査し、中世二神家の活動の多面性を明らかにする。
2. 近世二神家文書の整理・読解をさらに進め、近世二神家の活動を明らかにする。
3. 「二神系譜研究会」の活動状況を調査・分析し、その社会的意義を明らかにする。

共同研究は全体で3年計画とし、2016年度より2年間に調査期間、2018年度を成果報告の年とする。研究にあたっては「二神系譜研究会」と連携し、成果を地域還元できるように心がける。期待される成果としては、年に1回の現地調査と年2回の学内研究会を実施予定である。



二神司朗家文書(研究所蔵)



二神島の漁港(2018年3月)

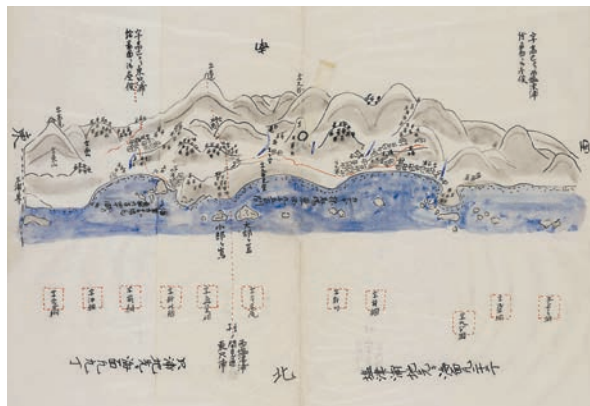
期間:2015年～ 代表者:安室 知

〔調査地域〕日本常民文化研究所所蔵の漁場図に描かれている地域。加えて、共同調査地として気仙沼大島(宮城県)を設定

〔研究目的〕

本共同研究は、本研究所の海域・海民史の研究蓄積を継承し発展させるものとして位置づけられる。海は水産物だけでなくさまざまな資源を生み出す。その開発・利用に当たっては、人・物・情報の行き来を促し、そうした営みを通して社会知や民俗知が膨大に集積される空間となっている。反面、負の記憶として海域の利用をめぐる個人や村のレベルから国際的な問題まで対立や紛争を生んできた。また海と対峙する海村では、大災害や事故が歴史的に繰り返されてきた。そうした海域・海村の歴史民俗文化について「漁場図」に描かれた景観を手がかりに、本研究所の人的資源を活用し学際的に研究することが主な目的となる。

期待される成果としては、フィールドワークをおこない、共同研究会において学際的な検討を経た後、研究成果を論文集としてまとめる。また、常民研が所蔵する「漁場図」のデジタル化・図録化を進め、研究資源として広く社会に公開する。



「カナギ漁の漁場図(塩津)」(研究所蔵)



「GISの強みと弱み—GISによる歴史史料(漁場図)研究の可能性」
竹村紫苑氏の発表(2018年2月)

研究拠点 気仙沼大島漁協文庫の管理と活用

期間:2016年～ 代表者:内田青蔵

〔調査地域〕宮城県気仙沼市

〔目的〕

神奈川大学日本常民文化研究所と大学院歴史民俗資料学研究科、および工学部建築学科重村・三笠研究室が協働で行ってきた気仙沼大島漁業協同組合資料の保全・再生活動では、4,000点強の漁協資料を分類整理し、2015年9月に完成した大島漁協文庫にそれらを収めた。

この大島漁協文庫は、単に漁協資料の保全のためのみならず、本研究所と歴史民俗資料学研究科等の研究拠点になると同時に、地元有志を中心とした「大島漁協文庫の会」により運営・活用され、大島の文化発信の拠点としての成長も期待される。



古い資料の錆びたホッチキスを除去する作業(2017年3月)



大島漁協文庫



文庫の整理作業(2017年3月)

科研費【基盤研究(B)】 ブラジル日本人入植地の歴史民俗学的研究

期間:2015年4月1日～2019年3月31日 代表者:佐野賢治

〔調査地域〕南米とくにブラジル国サンパウロ州における日本人入植地および戦後沖縄移民をふくむ日系人集住地区

〔研究目的〕

本共同研究は、本研究所の日本および近隣東アジア地域の民俗、民衆史の研究で確立された研究視角と調査手法を、南米の日系人社会という新たな対象へと展開する試みである。南米移民が始まった20世紀初頭、戦争による中断、経済成長による移出民の停止などといった国際関係の変遷をおさえつつも一般移民の日々の生活世界を描き出すことに主眼を置き現地調査を重視し、民具や建築といった物質文化の記録化をすすめ、地方に残された私的な史資料を探索し読み解く。最初期の国策入植地であるイグアッペ植民地をベースとなる調査地としたうえで、すでに蓄積がある研究調査分野を延長し、長野県人による開拓地や沖縄系移民集住地区での調査も並行してすすめる。

毎年3回の研究会を開催し、日系人研究専門家を招聘して研究動向を学習する機会とする。完成時には公開シンポジウムを開催し、ブラジル日本人入植地の歴史と民俗について民俗誌的な論文集を刊行する。



レジストロ入植地内の日本人家屋
(沖山すず邸／2010年文化財指定)



レジストロ入植地第5部小学校
(土井ニコラウ・ヒサシ氏提供)



レジストロ入植地での蘭草栽培



西欧式日本式の墓標が混じるセッテバラス入植地の墓地から通称「リベイラ富士」をのぞむ

受託研究 三宅村郷土資料公開・保存事業

期間:2017年11月1日～2018年2月28日(継続) 代表者:内田青蔵

〔調査地域〕東京都三宅島

〔研究目的〕

三宅村の委託研究として、三宅村郷土資料の調査、公開、保存に関わる事業を進めるため、現地に調査、整理作業を行う。具体的には三宅島郷土資料館の資料目録を作成する。また、三宅村の古老に生業や慣習などについて聞き書き調査を実施し、その結果をオーラルヒストリーとして冊子体にまとめる。三宅村は度重なる火山噴火に見舞われた。島内には歴史的に重要な諸資料をはじめ三宅島だけに伝わる固有の民俗が残されており、既調査でもテングサ採取の最盛期の実態や、鳥羽地方から移住した海女が存在、江戸時代に禁制とされた不受不施派僧侶の墓石の存在などが確認されている。文化財の調査、保存態勢の構築が急がれる中で、本調査の果たすべき役割は大きいといえる。



三宅島での聞き取りの様子(2017年11月)

受託研究 国立研究開発法人水産研究・教育機構古文書目録作成業務

期間:2017年8月4日～2018年3月16日(継続) 代表者:安室 知

〔調査地域〕和歌山県海南市下津町ほか

〔研究目的〕

昭和24～30年にかけて、水産庁が日本常民文化研究所に委託してはじめられた「漁業制度資料調査保存事業」によって、全国の漁業・漁村資料およそ20万点が収集された。その中には、漁業権に関する資料のほかに絵図類なども含まれていた。資料は、国立研究開発法人水産研究・教育機構中央水産研究所図書資料館に収蔵されている。同資料の整理・目録化作業は、現在では同法人による委託事業として進められている。

目録集の刊行にあたっては、現地調査を行い、資料群の旧所蔵者宅を訪問して、資料群の伝来に関する諸情報を取材し、あわせて現地研究者にも聞き取りを行い、資料群の解説を付している。



和歌山県文書館(和歌山県和歌山市・海南市調査にて／2017年1月)

共同研究の成果

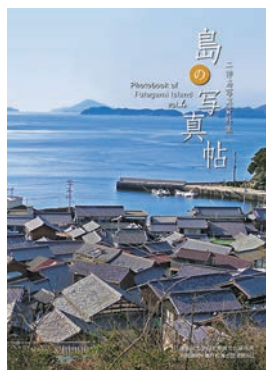
調査が終了した下記の共同研究は、現在報告書や資料目録などの編集を行っています。

共同研究 瀬戸内海の歴史民俗

[調査地域] 愛媛県松山市二神島

・2018～2020年度編集予定

二神司朗家文書 近世資料編
二神司朗家文書 近世資料集・由利島
島の写真帖 二神島写真資料集 Vol.4
漁業組合文書目録
青年団文書目録



島の写真帖 二神島写真資料集
Vol.4(2018年7月)



所蔵文書の写真撮影(2017年7月)



二神島豊田造船所資料集
(2018年3月)

共同研究 山城国大山崎荘の総合的研究

[調査地域] 京都府乙訓郡大山崎町

・2018～2020年度編集予定

離宮八幡宮文書目録1・2



これまでに刊行された目録

共同研究 奥能登の研究

[調査地域] 石川県輪島市

・2018～2020年度編集予定

井池家文書目録
岩倉寺文書目録

日本常民文化研究所研究会

日本常民文化研究所は、1983年より年数回、所員相互の検証・批判を経た研究成果を共有するため、公開形式で「神奈川大学日本常民文化研究所研究会」を開催しています。

所員、および客員・特別研究員による専攻分野の研究発表や、研究水準の向上を図るために、所外や海外の研究者にも発表を依頼しています。毎回テーマを新たに設定することで、異なる研究分野との交流や最新の研究動向を発表する場ともなっています。継続的に行われ、開催回数は通算116回(2018年6月現在)となり、常に関連研究の発展と向上に努めています。

2017年度 日本常民文化研究所研究会

第112回 2017年5月17日

「つながりとしての門中—沖縄文化の新たな研究視点を通して—」小熊 誠

第113回 2017年6月21日

「接触領域における公衆衛生—米軍占領下沖縄の結核対策を事例に—」泉水英計

第114回 2017年7月19日

「民俗学史における魚名研究の意義—渋谷敬三と柳田国男—」安室 知

第115回 2018年2月21日

「浙江平湖倣社について」畢雪飛

第116回 2018年6月20日

「絵馬から見る村落風景—喜多方市村松湯殿神社の絵馬を中心に—」佐々木長生



第112回研究会 発表／小熊誠(2017年5月)



第114回研究会 発表／安室知(2017年7月)

所蔵資料・図書

Holdings

- ❖ 本研究所の所蔵資料は、下記のように多岐にわたります。それは、各地の多くの方々のご協力をいただいて、研究所が取り組んできた調査研究と資料収集活動を跡づけるものといえるでしょう。整理が済んだものから順に公開を進めつつあり、基本的に研究目的の利用が可能です(要事前連絡)。
- ❖ さかのぼれば、渋沢敬三がアチックミュージアムソサエティを立ち上げた直後の1921(大正10)年に、9項目の運営方針が決められました。その中に、会の事業として、「標本の蒐集、整理、研究、殊に玩具の研究、文献の蒐集(略)」とあり、アチックの基本姿勢に当初から資料の蒐集があったことがわかります。その後、さまざまな事情から、渋沢およびアチックの蒐集した資料は、現在数箇所に分散、収蔵されています。本研究所では、神奈川大学付置となった後に新規に受け入れた資料群とあわせて、現在所蔵している資料を活用できる環境作りをめざしています。
- ❖ Webサイトの「神奈川大学デジタルアーカイブ」で所蔵資料の検索や映像資料動画の閲覧、「絵画資料デジタルコレクション」で絵画資料の一部が閲覧可能です。※詳細は14ページをご覧ください。

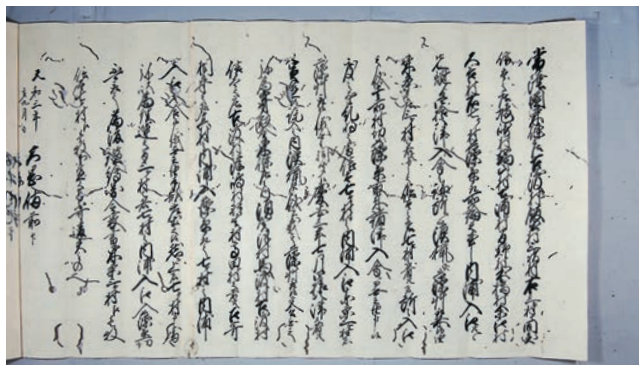
所蔵資料

古文書

本資料には、①研究所が所蔵する古文書類と②各地域で撮影した古文書写真(マイクロフィルム複写古文書)が含まれています。①の古文書類は、アチック・ミュージアム、「漁業制度資料調査保存事業」、神奈川大学日本常民文化研究所が収集したものが、その中には中世文書を含む「二神司朗家文書」があります。②の古文書写真は、マイクロフィルムやデジタル写真で記録され、奥能登の「時国健太郎家文書」「池田周三家文書」などが含まれています。



二神司朗家文書(研究所蔵)



永長栄三郎家文書(研究所蔵)

漁業漁村資料(筆写稿本)

水産庁からの委託により1949年に開始された漁業制度資料調査保存事業において、財団法人日本常民文化研究所月島分室で筆写作成された資料が筆写稿本です。現在、ほぼ同一の筆写稿本が神奈川大学日本常民文化研究所と国立研究開発法人水産研究・教育機構 中央水産研究所図書資料館に残されています。筆写はほぼ5年間におよび、全国各県にわたるおよそ30万枚の「漁業制度資料」の筆写原稿(200字詰)が残されています。



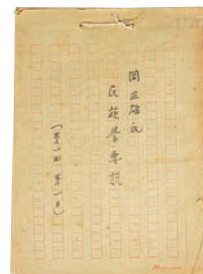
筆写稿本(研究所蔵)

常民研運営資料

常民研はアチックミュージアムソサエティの創設から90年以上の歴史があり、運営に関する諸資料も蓄積されてきました。議事録、日誌、書簡類、帳簿などの資料群は、財団法人解散時に引き継がれたもののほか、時々の研究所運営の中心人物の手元にのこされていたものなどです。また1999年に解散した民族学振興会の運営資料も引き継いでいます。財団引継資料、宇野脩平資料、河岡武春資料、民族学振興会資料などがあります。



藤木喜久馬「古文書と魚名の漢字」の原稿(研究所蔵)



岡正雄による講演の筆記録表紙(研究所蔵)

絵画資料

おもにアチック・ミュージアムで収集・模写された資料で、鯰絵、近世の農業・農具を知るための好資料として著名な『耕稼春秋』、明治13年(1880)成立の『農具絵図』、稲作の作業と子供の遊びの風景、祭礼行事が描かれた元禄16年(1703)水簀和継筆『四季耕作子供遊戯図巻』などを所蔵しています。また『絵巻物による日本常民生活絵引』編纂に伴い、おもに村田泥牛によって作成された日本中世の絵巻物から常民の生活に関わる場面を抜き書きし模写した原画約800点があります。

『四季耕作子供遊戯図巻』、『農具絵図』は研究所 Web サイト内の「絵画資料デジタルコレクション」で閲覧できます。

※詳細は14ページをご覧ください。



『四季耕作子供遊戯図巻』(研究所蔵)

写真映像資料

● **写真資料**——アチック写真 昭和初期に渋谷敬三らアチック・ミュージアムの同人により撮影された日本・朝鮮・台湾など約8,000点のスチール写真です。

横浜写真 幕末から明治の横浜の風景、風俗を撮影したステレオ写真と白黒写真に彩色を施した写真です。

● **映像資料**——アチック・ミュージアムの漁村・農村調査にて、16ミリフィルムに昭和初期の庶民の生活や景観を記録した映像です。23作品あり、「神奈川大学デジタルアーカイブ」で公開しています。



アチック写真 中之島の魚踊り 撮影者:江崎悌三 目録番号:ア-10-86(研究所蔵)



横浜写真(VIEW OF YOKOHAMA.) (研究所蔵)



アチックフィルム「直江津片田家行事・白萩村アワラ田植」(研究所蔵)

民俗資料

● **製作資料**——研究テーマにあわせて製作された資料です。職人による製作技術の記録となる鍛造品工程見本、5分の1に縮小して仕立てられた仕事着のひな型のコレクション、船大工近藤友一郎氏による和船模型などがあります。

● **収集資料**——実際に使用されていた民具で、農・漁・衣・信仰関係などの資料があります。商家の民具約2,000点、小絵馬約2,000点、ちりめんなどの残り布で作られた小裂細工約300点、ぼろ布などの衣関係を所蔵しています。



製作資料 鍛造工程見本(研究所蔵)



製作資料 5分の1に縮小し製作した仕事着(研究所蔵)



収集資料 小絵馬(研究所蔵)

所蔵資料検索

本研究所の所蔵資料は資料横断検索システム「神奈川大学デジタルアーカイブ」にて検索や映像資料の動画閲覧、また絵画資料の一部は研究所Webサイト内の「絵画資料デジタルコレクション」で閲覧可能です。ともに研究所のWebサイトからリンクしています。

<http://jominken.kanagawa-u.ac.jp/>



バナーをクリック



日本常民文化研究所 Web サイト TOP ページからリンク

資料横断検索システム「神奈川大学デジタルアーカイブ」

本研究所の論文等の書誌情報、写真資料や絵引、古文書などの目録と拡大画像、映像資料の動画を画面上で閲覧できます。また、大学資料編纂室、非文字資料研究センターの所蔵・収集資料についても、横断的に検索することが可能です。データは随時更新し、内容を拡充していきます。



目録詳細と画像を確認



写真資料の拡大画像の閲覧や古文書などのPDF閲覧も可能です



映像資料は動画再生で閲覧

「絵画資料デジタルコレクション」

研究所 Web サイトにて下記の絵画資料を公開しています。

『四季耕作子供遊戯図巻』

縦はほぼ30cm、横は約7.8m、紙本彩色の卷子本を、画面上でスクロールして閲覧できます。

梅・桜やススキ・紅葉など季節の移ろいを示す要素を随所に配したカラフルな作品で、短い跋文と「元禄十六年(1703)南呂(8月)上旬、水實和継(印)」の署名があります。



7.8mにおよぶ図巻の端から端までスクロールし、拡大して閲覧できます

『農具絵図』

所蔵している『広島県下農具絵図』『山城丹波農具ノ図』『農具解説群馬県』『和歌山県西牟婁郡農具絵図面』『和歌山県日高郡農具絵図』の5冊を画面上で全ページを閲覧できます。木下忠氏の「明治十三年調農具絵図の成り立ち—日本常民文化研究所本と岩瀬文庫本—」(『民具マンスリー』14巻11号 1982)で愛知県の西尾市岩瀬文庫に所蔵されている同本を書写したものであると確認されています。



『広島県下農具絵図』ページをめくり拡大して閲覧



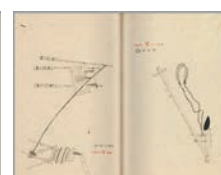
山城丹波農具ノ図



農具解説群馬県



和歌山県西牟婁郡農具絵図面



和歌山県日高郡農具絵図

所蔵図書

本研究所の所蔵図書は図書と逐次刊行物で構成されています。

図書

一般蔵書、および下記の文庫を含むすべての図書は神奈川大学図書館 OPAC (<http://ufinity.kanagawa-u.ac.jp/>) から検索ができます。

● 一般蔵書

一般蔵書は、財団法人のころから収集した図書に、神奈川大学に移った後、寄贈・交換・購入した図書を加えた蔵書です。主に地方史・郷土史・民俗学・民族学・水産史・技術史を中心に構成され、総数は約5万冊にのぼります。

● 文庫紹介

【彌永貞三文庫】

戦後を代表する日本古代史研究者の一人、故彌永貞三(1915－1983)の蔵書です。彌永は名古屋大学文学部教授、東京大学史料編纂所所長、上智大学文学部教授などの職を歴任し、特に土地制度史を中心とする社会経済史の分野で手堅い実証にもとづく重要な業績を数多く発表して戦後の日本古代史学界をリードしました。代表作は『奈良時代の貴族と農民』(1956)、『日本古代社会経済史研究』(1980)、『日本古代の政治と史料』(1988)。本文庫は名古屋大学で彌永の同僚であった元所員故網野善彦の紹介により受け入れたもので、日本古代史はもとより中国史・仏教史など関連分野の蔵書も充実しており、彌永の学識の広さをうかがうことができます。

【財団法人民族学振興会旧蔵書】

財団法人民族学振興会は1934年(昭和9年)に日本民族学会として発足しました。初代理事長には白鳥庫吉、理事に本研究所創設者の渋谷敬三が名を連ねていました。以来、1999年の解散に至るまでの、65年に及ぶ活動の中で収集された蔵書群です。解散に伴い、本研究所ではこれらの蔵書群を受け入れました。本蔵書の特色は、戦前に出版された、中国及び東南アジア諸地域の民族・民俗関係の調査の報告書及び、それに関する書籍類が多数含まれている点にあります。現在では入手困難な書籍も多く、同会の蔵書は日本の民族学研究を検討する上で重要な意味を持っています。



財団法人民族学振興会旧蔵書

【河岡武春文庫】

故河岡武春(1927－1986)は漁村民俗、漁業史、民具研究などを行った民俗学者です。山口県下関に生まれ、大学卒業後、財団法人日本常民文化研究所所員となりました。1982年には神奈川大学経済学部教授に就任。生涯にわたり、本研究所の活動を支え、『民具マンスリー』の創刊、日本民具学会の設立等に携わりました。主な著作に『海の民－漁村の歴史と民俗－』(1987)などがあります。本文庫は学生時代より蔵書家であった、河岡のコレクションであり、民俗・歴史分野に加え、水産関係、文学の書籍も多数含まれています。渋谷敬三の意を汲み、日本各地の民俗学、民具研究者の育成に尽力した氏の研究を顕著にあらわした蔵書群となっています。

【宮田登文庫】

1994年(平成6年)より神奈川大学教授、日本常民文化研究所所員を務め、大学院歴史民俗資料学研究科にて後進の指導にあたった故宮田登(1936－2000)の蔵書。宮田は『ミロク信仰の研究』(1970)、『妖怪の民俗学』(1985)、『日和見』(1992)、『日本人と宗教』(1999)等多くの業績を残し、長い間民俗学界を牽引しました。本蔵書は宮田が研究の過程で蓄積したもので、主に民俗学、歴史学、宗教の書籍や各種の叢書類で構成されています。宮田民俗学の形成、発展を知る上で不可欠の資料となっています。

逐次刊行物

● 一般逐次刊行物

逐次刊行物は他大学の紀要、全国の博物館、資料館、研究会などとの交換により、約2,700タイトルが所蔵されています。

● 民族学振興会旧蔵逐次刊行物

蔵書と同様に民族学振興会が受け入れていた逐次刊行物で、1,715タイトルが所蔵されています。



- ❖ 現在、本研究所が企画編集する『歴史と民俗』、民具研究者の交流の場としての『民具マンスリー』を定期的に刊行しています。また、資料・生活記録を中心とした「神奈川大学日本常民文化叢書」、委託研究の成果としての「調査報告」、フィールド調査の成果に基づく「調査資料目録」のほか、調査・研究の態様に応じた出版事業にも取り組んでいます。

歴史と民俗



本研究所が特集を組み編集する論集で、1986年に創刊されました。論文や資料紹介、常民文化研究講座や公開シンポジウムの報告等を掲載しています。原則年1回、平凡社からの刊行で2018年現在、通巻34号。なお、25号(2009年)からは所員が特集を企画し、これまで「ことばの力」、「騙り—不幸なる芸術」、「渋谷敬三没後50年」、「天皇、王の葬儀」などのテーマで特集を組んできました。32号からは常民文化研究講座のテーマと連動した特集を組み、33号(2017年)では、特集を拡大・充実し、一般論考との二本柱として構成をリニューアルしています。

35号(2018年度)では、2017年度に開催された第21回常民文化研究講座「二神島その歴史と民俗を訪ねて」の特集となり、論考7本、コラム3本の構成で刊行の予定です。一般論考は、所員・研究員及び本研究所の共同研究への参加・協力者の寄稿となっています。

※購入は平凡社へお問合せください。

歴史と民俗34 〈2018.3〉

- 【特集〈揺れる沖縄〉】 [解題] 特集「揺れる沖縄」(小熊誠)／沖縄 占領直後の住民生活(川平成雄)／「島クトゥバで語る戦世」の二〇年(比嘉豊光)／オキナワン・ロックをめぐる沖縄・アメリカ・日本(ロバーソン・ジェームス／訳 泉水英計)／土地と移民—琉球政府ポリビア計画移民の端緒(豊見山和美)／日銀から見た沖縄返還と通貨交換—自衛隊利用、中央省庁の対応など中心に(軽部謙介)／コザにおける住民と米兵の多重性—ロバーソン報告のコメントにかえて(泉水英計)／「民衆生活史」を通して「揺れる沖縄」を透視すること—川平報告へのコメント(安田常雄)／沖縄の国政参政権の「剥奪」「付与」の近現代史／—新領土の沖縄、権利なき臣民・国民としての沖縄人(後田多敦)
- 【一般論考】 柳田国男が描く日本地図—消される北海道、揺れる沖縄(安室知)／猿と猩々が守る都市宇宙—高岡御車山祭のコスモロジー(小馬徹)／「喜兵衛どん」(旧仲善家住宅)の建築について(津田良樹)／災害と歴史的建造物—中村半二郎家住宅調査を中心に(橘川俊忠・津田良樹・小玉嘉裕)

過去のバックナンバーはWebサイトへ

- 『歴史と民俗』1号からのバックナンバーの詳細は、研究所Webサイトにて公開しています。
「神奈川大学デジタルアーカイブ」からも検索可能です。ご批評、ご意見・感想は下記までお寄せください。

宛先 E-mail : jomin-kankobutu@kanagawa-u.ac.jp
〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1 神奈川大学日本常民文化研究所
『歴史と民俗編集部』宛までお送りください。

民具マンスリー

Mingu Monthly

❖ 2018年5月時点で通巻602号(第51巻2号)まで刊行されています。民具を中心とする物質文化研究をテーマとする雑誌の中では最も古い歴史をもっています。

アチック・ミュージアム創設当初から一貫して、研究対象を民具などの物質文化に据えていたことから、渋沢没後の1968年、当時の(財)日本常民文化研究所の運営を担っていた河岡武春らにより、4頁のリーフレットから刊行がはじめられました。1981年より、神奈川大学の附属機関となってからも刊行は着実に継続され、現在は月刊24頁となっています。

創刊の目的は、民具の基礎的な研究の確立と共に、研究者相互の連絡、提携、情報交換等で、現在でもその基本姿勢は変わりません。『民具マンスリー』の蒔いた種がさまざまな形で開花した結果、1976年に日本民具学会が設立され、全国各地の民具研究組織も活発に活動するようになってきています。

いま市町村合併による地域博物館・資料館の統廃合が進み、これまでに収集・保存されてきた民具がどうなるのか、心配な面も出てきています。人々の暮らしとともに歩んできた民具は、文字記録に残らなかった地域社会の歴史や暮らしの情報を伝えています。これらを研究を通して引き出し、民具の大切さをそれぞれ身近なところで訴えていかねばなりません。『民具マンスリー』は、こうした活動を支える研究誌・情報交換誌でありたいと願っています。

『民具マンスリー』は、会員制の月刊誌で、みなさんの投稿によって支えられてきました。みなさんの自薦・他薦による投稿をお待ちしています。



入会方法

会員を随時募集しています。申込方法は以下の通りです。

1. 年間購読会費 3,500円(送料含む)
2. 毎年年度替わりで、4月から1年間。年度途中からの入会もできますが、その場合は当該年度既刊行分をお送りすることでかえさせていただきます。また、ご入会されると会誌への投稿ができます。なお、投稿規定は、毎年4月号、および研究所Webサイトに掲載しています。
3. 入会ご希望の方は、「民具マンスリー入会希望」と明記の上、氏名・住所・電話番号を記載し、メール、Faxまたは葉書にてお申込みください。ご連絡が届き次第、入会案内と入会書をお送りいたします。
4. 宛先 E-mail: ming-monthly@kanagawa-u.ac.jp Fax: 045-413-4151
または葉書にて、〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1 神奈川大学日本常民文化研究所
『民具マンスリー編集部』宛までお送りください。
お問い合わせ Tel: 045-481-5661(代)

●『民具マンスリー』のバックナンバーの詳細は、研究所Webサイトに公開しています。

「神奈川大学デジタルアーカイブ」からも検索可能です。



	入手方法
共同研究「瀬戸内海の歴史民俗」(神奈川大学日本常民文化研究所編) 1. 二神司朗家文書 中世文書・系図編 2016.3 2. 論集 瀬戸内海の歴史民俗 2016.11 3. 二神島 葬送と墓の民俗 資料編 2017.8 4. 島の写真帖 二神島写真資料集 Vol.1 2015.5 5. 島の写真帖 二神島写真資料集 Vol.2 2016.2 6. 島の写真帖 二神島写真資料集 Vol.3 2017.6 7. 島の写真帖 二神島写真資料集 Vol.4 2018.7 8. 二神島豊田造船所資料集 2018.3 9. 二神司朗家文書 近世資料集・由利島 2019.3(予定)	A
奥能登と時国家(神奈川大学日本常民文化研究所奥能登調査研究会編) 1. 奥能登と時国家 研究編1 1994.8 2. 奥能登と時国家 調査報告編2(建築・考古・石造物) 1995.8 3. 奥能登と時国家 調査報告編1(文書・書籍) 1996.5 4. 奥能登と時国家 研究編2 2001.8 5. 奥能登と時国家 調査報告編3(民俗) 2001.8	B
常民資料叢書(神奈川大学日本常民文化研究所編) 1. 紀州小山家文書 2005.4 2. 本山雜記 2007.3	C
新版絵巻物による日本常民生活絵引第一〜五巻 遊澤敬三・神奈川大学日本常民文化研究所編 1984.8	B
神奈川大学日本常民文化研究所調査資料目録(神奈川大学日本常民文化研究所編) 1. 疋田家文書目録 山城国乙訓郡大山崎荘(京都府乙訓郡大山崎町) 2005.3 2. 観音寺文書目録 山城国乙訓郡大山崎荘(京都府乙訓郡大山崎町) 2005.3 3. 時国健太郎家文書目録 (石川県輪島市町野町南時国) 2006.3 4. 青木繁男家文書目録 山城国乙訓郡大山崎荘(京都府乙訓郡大山崎町) 2010.3 5. 松井幸信家文書目録 山城国綴喜郡松井村(京都府京田辺市) 2010.3 6. 岩井貞之家文書目録 山城国乙訓郡大山崎荘(京都府乙訓郡大山崎町) 2012.12	A
神奈川大学日本常民文化研究所所蔵資料目録(神奈川大学日本常民文化研究所編) 1. 中村半二郎家文書目録 2011.3 2. 永長栄三郎家文書目録 2011.3 3. 二神司朗家文書目録(一)中世・近世編 2012.8 4. 二神司朗家文書目録(二)近代・現代編1 2013.3 5. 二神司朗家文書目録(三)近代・現代編2 2016.3 6. 二神司朗家文書目録(四)近代・現代編3 2016.10	A
神奈川大学日本常民文化研究所調査報告(神奈川大学日本常民文化研究所編) 1. 第10集 十三塚一実測調査・考察編一 1985.10 2. 第11集 仕事着—東日本編— 1986.11 3. 第12集 仕事着—西日本編— 1987.11 4. 第13集 民具実測図の方法I[農具] 1988.10 5. 第14集 民具実測図の方法II[漁具] 1989.10 6. 第15集 民具実測図の方法III[生活用具] 1990.10 7. 第16集 運搬具—背負う・提げる・載せる・曳く— 1992.3 8. 第17集 漁民の活動とその習俗I 1993.7 9. 第18集 漁民の活動とその習俗II 1995.6 10. 第19集 暮らしのなかの技術と芸能—中国江西省と韓国鬱陵島— 2002.11 11. 第20集 奥会津地方の職人巻物—書承と口承の交錯— 2006.3 12. 第21集 有明海及び中海の里海としての利用慣行 2014.3 13. 第22集 アイヌ民族に伝わる漆器の調査研究 —アイヌ民具としての漆器類の基礎的データの収集と分析— 2014.7 14. 第23集 奥能登における真言宗寺院の年中行事を中心とした民俗調査 —町野結衆寺院を事例として— 2015.1 15. 第24集 明治農具絵図・関連文書群の全国調査 2016.3	B
国際常民文化研究機構 共同研究[奨励]調査報告書 (神奈川大学日本常民文化研究所・神奈川大学国際常民文化研究機構編) 16. 第25集 河原田盛美における本草学的知識から近代勤業的実践の転換に関する研究 2017.2 17. 第26集 アチック・ミュージアムの調査活動に関する基礎研究 —「隠岐」調査の検証・分析と民俗学的考察— 2018.2 18. 第27集 宮城県気仙沼大島における遠洋漁業の歴史的変遷に関する研究 —震災救出資料を中心として— 2019.2(予定)	A

	入手方法
神奈川大学日本常民文化叢書(神奈川大学日本常民文化研究所編) 1. 喜界島風土記 拵嘉一郎著 1990.4 2. 鍛冶道具考 吉川金次著 1991.8 3. 瀬戸内海西部の漁と暮らし 進藤松司著 1994.3 4. 芦東山日記 橘川俊忠校訂 1998.3 5. ハワイ日系移民の服飾史 パーバラ・F・川上著 香月洋一郎訳 1998.12 6. 伊勢道中日記 西和夫編 1999.11 7. 澁澤敬三先生と私—アチック・ミュージアムの日々 拵嘉一郎著 2007.10	B
神奈川大学日本常民文化研究所年報(神奈川大学日本常民文化研究所編) 1. 年報2014 2016.3/2. 年報2015 2017.8/3. 年報2016 2017.12/4. 年報2017 2019.3	A
水産総合研究センター所蔵古文書目録(独立行政法人水産総合研究センター・神奈川大学日本常民文化研究所編) 1. 2001年度 初島史料(静岡県熱海市初島)目録 2002.3 2. 2002年度 茨城県(霞ヶ浦・北浦周辺地域)関係史料目録 2003.3 3. 2003年度 浜波太漁業組合文書(千葉県鴨川市)目録 2004.3 4. 2004年度 千葉県(房総半島沿岸地域)関係史料目録 2005.3 5. 2005年度 福島県・茨城県・栃木県・千葉県(補遺)関係史料 2006.3 6. 2006年度 山口県関係史料目録 2007.3 7. 2008年度 村上茂夫家文書(宮城県気仙沼市)目録 2009.3 8. 中央水産研究所所蔵古文書(漁業制度資料)の概要—全100資料群の概要と収集・整理の経過— 2006.3 9. 中央水産研究所所蔵筆写稿本(漁業制度資料)の概要 2011.11 10. 2012年度 鹿児島県関係史料目録 2012.12 11. 2014年度 愛知県・三重県・京都府・大阪府関係史料目録 2014.1	F
水産研究・教育機構所蔵古文書目録 (国立研究開発法人水産研究・教育機構中央水産研究所・神奈川大学日本常民文化研究所編) 12. 2016年度 東京都・神奈川県・静岡県関係史料 2017.1 13. 2018年度 下津浦漁業組合文書(和歌山県海南市) 2018.8(予定)	
輪島市町野地区関係古文書目録(神奈川大学日本常民文化研究所編・輪島市教育委員会発行) 1. 石川県輪島市町野町牛尾・伏戸区有文書目録 2004.3 2. 石川県輪島市町野町曾々木区有文書目録 2005.12 3. 石川県輪島市町野町寺山 久保家文書目録 2005.3 4. 石川県輪島市町野町東大野 池田周三家文書目録 2008.3 5. 石川県輪島市町野町東大野 南惣右衛門家文書目録 2018.3	G
古文書の補修と取り扱い 中藤靖之著 神奈川大学日本常民文化研究所監修 1998.6	D
ビデオ二神島(神奈川大学日本常民文化研究所編) 1. 第1巻 海で結ばれた世界 瀬戸内海二神島 2000.11 2. 第2巻 海の民の歴史 二神家の歴史を通して 2000.11 3. 第3巻 発掘調査の実際 二神家墓地遺跡発掘現場から 2000.11	E
海と非農作業民—網野善彦の学問的軌跡をたどる(神奈川大学日本常民文化研究所編) 2009.7 *講演CD「日本列島における海民の移動と移住」付き	H
国際常民文化研究叢書(神奈川大学国際常民文化研究機構編) 1. 漁場利用の比較研究 2013.3 2. 日本列島周辺海域における水産史に関する総合的研究 2013.3 3. 東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史 2013.3 4. 第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学 2013.3 5. 環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究[映像記録DVD付] 2014.3 6. 民具の名称に関する基礎的研究[民具名一覧編] 2014.3 7. アジア祭祀芸能の比較研究 2014.10 8. アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象[資料編] 2014.3 9. 民具の名称に関する基礎的研究[地域呼称一覧編] 2015.3 10. アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象[論文編] 2015.3 11. 「民族研究講座」講義録 2015.3 12. 東アジアの伝統的木造船建造および操船技術の比較研究[写真記録CD付] 2018.3	I



入手方法

A: 本研究所へ B: 平凡社へ C: 日本評論社へ D: 雄山閣出版へ E: 紀伊國屋書店へ F: 国立研究開発法人水産研究・教育機構中央水産研究所図書資料館へ G: 輪島市教育委員会へ H: 岩波書店へ I: 神奈川大学国際常民文化研究機構へ

● 上記以外の神奈川大学付属となる以前の刊行物は、本研究所で閲覧可能です。

● 神奈川大学日本常民文化研究所、国際常民文化研究機構発行の刊行物は、各研究機関・博物館等と随時交換し、公の利用に供しています。

展示

Exhibition

- ❖ 「神奈川大学日本常民文化研究所展示室」は、神奈川大学横浜キャンパス3号館にあるミュージアム機能を備えた、地域の方々に開かれた公開施設です。
- ❖ 1921年より創設されたアチックミュージアムソサエティから、戦前・戦後の日本常民文化研究所を経て、神奈川大学の付置研究所として約90年以上に及ぶ活動の歴史を紹介しています。

神奈川大学日本常民文化研究所展示室

Exhibition Room of the Institute for the Study of Japanese Folk Culture, Kanagawa University

パネルで活動を追うとともに、各地の常民の生活を記録した映像の上映など、多彩な表現によってこれまでの活動を知ることができます。収蔵資料の展示も合わせて行っており、2018年度は「小絵馬」を展示しています(展示内容は年1回程度変更予定)。また、「検索コーナー」では本研究所のWebサイトや「神奈川大学デジタルアーカイブ」で、日本常民文化研究所所蔵の資料や目録の検索が可能です。

DATA

神奈川大学横浜キャンパス3号館 神奈川大学展示ホール
神奈川大学日本常民文化研究所展示室

[開館] 月～土曜日10:00～17:00 ※入館は16:30まで

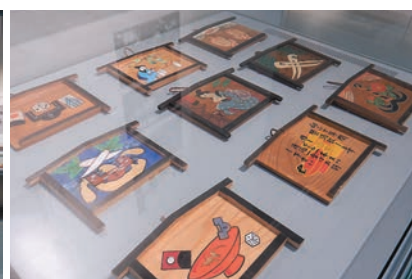
[休館] 日曜日・祝日、大学所定の休日、授業以外の土曜日



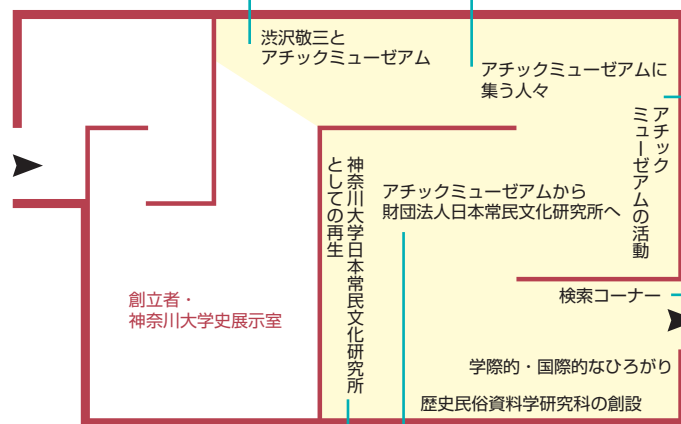
展示室入口



本研究所の活動の変遷をパネルで展示



ガラスケース内には収蔵資料を展示(写真は2018年度前期の小絵馬展)



「海からはじまる―『豆州内浦漁民資料』の発見」では常民の生活を映像でも紹介



「瀬戸内海 二神島とその成果」では調査のビデオも上映



漁業制度資料調査保存事業のパネル展示と小絵馬展示



「検索コーナー」ではパソコンで所蔵資料の検索が可能

弁財船実物大部分復元模型 近藤友一郎氏製作



帆船帆柱部分模型断面前方

3号館地下1階のロビーには、江戸時代から明治時代にかけて荷船として活躍した100石(約15トン)積弁財船帆船帆柱部分の実物大復元模型が展示されています。静岡県の船大工近藤友一郎氏の卓越した技術と研究によって、江戸時代的设计図をもとに製作されました。和船模型をとおして海との関わりや重要性を考え、今後は弁才船の帆走写真展示なども展開していきます。



模型断面後方

● 過去の展示の詳細は、研究所Webサイトで公開しています。

3号館地下2階の修復室・収蔵庫について

3号館の地下2階には、古文書の修復に使用される設備や、所蔵資料が収められている収蔵庫などがあります。

修復室・民具整理室

修復室では、古文書の修復に必要な道具が整い、大学院や学芸員課程の実習、古文書修復実習、民具実測実習などが実施されています。民具整理室では、民具資料の撮影が行われ、資料のカルテであるカード作成とデータ化をしています。



古文書の裏打ち作業の実習授業



小絵馬の撮影



修復室の設備



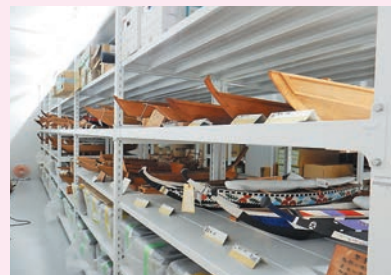
民具整理室

収蔵庫

非公開の和船模型や、これまで収集した民俗資料が収蔵されています。



財団常民より所蔵している筥資料



近藤和船研究所より引き継いだ和船模型

講座

Courses

❖ 本研究所は、研究成果を広く社会に伝えることも重要な役割と考え、そのための活動として「常民文化研究講座」「古文書修復実習」を積極的に開催しています。

常民文化研究講座

「常民文化研究講座」は、1997年以来、日本文化研究の領域を活性化させようとする意図のもと、毎年神奈川大学において開催しています。各回、常民の生活や文化、歴史をテーマとして設定し、講演会・シンポジウムで構成しています。開催時期・内容等は、研究所Webサイトでご案内しているのでご覧ください。



古文書修復実習



「常民文化研究講座」には、「古文書修復実習」と民具や民俗に関する実習の講座を併設しています。「古文書修復実習」では、基本的な3工程である①記録・整理、②修理(繕い・裏打ち)、③復原(化粧裁ち・製本)に加え、④襖などの下張り文書の剥離などを行っています。開催時期・内容等は、研究所Webサイトでご案内しています。

民具を語る

1974年の民具研究講座より併設の民具実測実習、2015年の民具研究ワークショップを経て2016年度から「民具を語る」研究会として年に2〜3回開催しています。『民具マンスリー』と有機的に連携し、編集部が企画を行い話題のテーマを実施、研究会報告を掲載しています。開催時期・内容等は、Webサイトでご案内しています。



このほか、本研究所では、所員が神奈川大学主催の市民講座を担当するほか、調査地の自治体や新聞社などと共催で、講演会やシンポジウムなども企画・実行してきました。今後もこうした機会を大切にしていきたいと思います。

2017年度の講座

第21回 常民文化研究講座

二神島 その歴史と民俗を訪ねて

—二神島調査と神奈川大学日本常民文化研究所— (2017年12月9日)

○調査報告

「二神島調査の経緯と新たな歴史発見」田上 繁

「中世二神氏と二神島」前田 慎彦

「二神種章の歴史意識—「水軍の記憶」を編む—」関口博巨

「二神島の墓石と供養」萬井良大

「和船と洋式船—二神島豊田造船所の記録から—」昆 政明

○パネルディスカッション：二神島調査の意義と展望

[パネリスト]石野弥栄 二神英臣 豊田 渉 田上 繁

前田 慎彦 関口博巨 萬井良大 昆 政明

[司会]津田良樹



パネルディスカッション



二神島ゆかりの写真を展示

古文書修復実習

(2018年3月11日〜12日)

①現状の記録・解体

②修理(繕い・裏打ち)

③復原(化粧裁ち・製本)

④下張り文書の剥離の工程実習

田上 繁 関口博巨

白水 智 山口悟史



修理／裏打ち。和紙を裏から貼り補強

民具を語る3 アイヌ文化を語る

(2017年5月31日)

「アイヌの北方交易と和人社会—アツシ・蝦夷錦・ラッコ皮—」

大塚和義



大塚和義氏



研究会風景

● 今後の開催予定・内容、および第1回(1997年6月)からの講座の詳細は、研究所Webサイトにて公開しています。

国際常民文化研究機構

International Center for Folk Culture Studies

- ❖ 国際常民文化研究機構は、神奈川大学日本常民文化研究所を母体として、2009年度より文部科学省の「共同利用・共同研究拠点」として認定され、「人文学および社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業」(2010年度より「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業」に変更)に採択されて発足した共同研究拠点です。2014年度に引き続き再認定され、第2期の活動を行っています。運営委員は、関連する研究者コミュニティの意向を反映するため、学外者が半数以上を占めています。
- ❖ グローバル化した国際社会にあって、等身大の生活文化を総合的に調査・研究・分析する方法論の確立を目指し、多文化共生の道を探ります。

共同研究公募事業

国際常民文化研究機構の目的は、日本常民文化研究所と非文字資料研究センターの所蔵する史資料とデータベースを研究者コミュニティに公開・共有化し、さらに研究分野を拡大、深化させることにあります。そのために次の4つの研究課題を設定し、研究テーマを公募しプロジェクト型共同研究を進めます。

1. 海域・海民史の研究
2. 民具資料の研究
3. 日本常民文化研究所所蔵資料に関する研究
4. 常民文化に関する研究

また、地域の研究者による研究を助成する目的で、「共同研究(奨励)」の公募も合わせて行っています。



共同研究(一般)民具の機能分析に関する基礎的研究
民具調査(所沢市山口民俗資料館/2017年12月)

プロジェクト型共同研究

現在は毎年公募により採択された4つのグループによる共同研究が進められています。

● 共同研究(一般)

1. 海域・海民史の研究 (2018～2020年度)

台湾の「海女(ハイルー)」に関する民族誌的研究
一東アジア・環太平洋地域の海女研究構築を目指して—
代表者 藤川美代子(南山大学/社会人類学)

2. 民具資料の研究 (2017～2019年度)

民具の機能分析に関する基礎的研究
代表者 神野善治(武蔵野美術大学/民俗学・民具学)

● 共同研究(奨励)

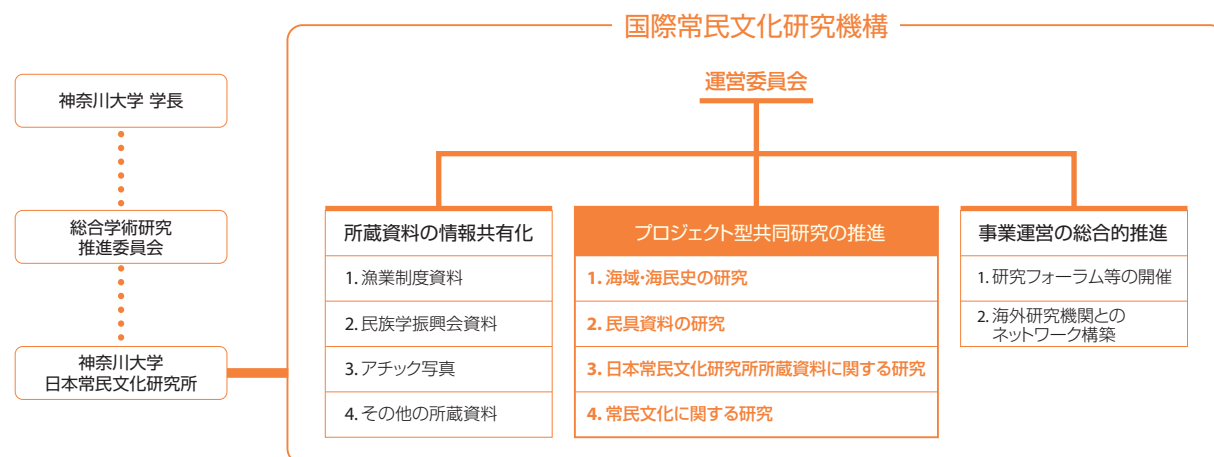
熊野水軍小山家文書の総合的研究 (2018～2019年度)

代表者 坂本亮太(和歌山県立博物館/日本中世史)

昭和戦前期の青年層における民俗学の受容・活用についての研究
(2017～2018年度)

代表者 丸山泰明(天理大学/民俗学)

組織と主な業務内容



成果の発信

国際常民文化研究機構では、共同研究の成果をフォーラムや刊行物のかたちで発表を行っています。

Web サイトでは開催情報や新刊、共同研究調査報告などの最新情報などを随時お知らせしています。

国際常民文化研究機構 Web サイト <http://icfcs.kanagawa-u.ac.jp/>

共同研究フォーラム

共同研究の成果は、研究期間の最終年にフォーラムにて発表を行い、研究者だけでなく一般にも広く公開しています。最新の開催情報は Web サイトをご覧ください。

- 第2回「東アジアの船—木造船技術とその構造—」(2017年7月8日)
共同研究(一般) 東アジアの伝統的木造船建造および操船技術の比較研究
- 第3回「アチック・ミュージアムにおける隠岐調査の軌跡」(2018年2月17日)
共同研究(奨励) アチック・ミュージアムの調査活動に関する基礎研究
—「隠岐」調査の検証・分析と民俗学的考察—
- 第4回「再考 アチック・ミュージアムの水産史研究
—“ハーモニアス・デヴェロップメント”の実像—」(2018年7月7日)
共同研究(一般) 戦前の渋沢水産史研究室の活動に関する調査研究



第2回「東アジアの船」 発表風景

国際研究フォーラム

学際的・国際的な共同研究拠点の確立を目指し、「常民」文化研究の推進に関わる課題を設定し、国際研究フォーラムを開催しています。

2018年度には、東アジア地域を事例として民具の形態と機能、象徴に関わる問題に焦点を当てた、民具研究者によるフォーラムを開催する予定です。

- 第20回 常民文化研究講座・国際研究フォーラム
「揺れる沖縄—戦争から占領、そしてシマクトゥバからオキナワン・ロックまで—」
(2016年12月10日)



第20回「揺れる沖縄」 総合討論

刊行物

共同研究の成果は刊行物として発行し、「神奈川大学学術機関リポジトリ」でも公開しています。 <http://klibredb.lib.kanagawa-u.ac.jp/>

● 共同研究(一般)

国際常民文化研究叢書 第12巻

東アジアの伝統的木造船建造および操船技術の比較研究(2018年3月発行)

代表者 昆 政明(神奈川大学/民具学)

● 共同研究(奨励)

神奈川大学日本常民文化研究所調査報告 第26集

(国際常民文化研究機構 共同研究[奨励]調査報告書)

アチック・ミュージアムの調査活動に関する基礎研究

—「隠岐」調査の検証・分析と民俗学的考察—(2018年2月発行)

代表者 小林光一郎(神奈川大学日本常民文化研究所/日本民俗学)



- 国際常民文化研究機構の詳細は、Web サイトをご覧ください。 <http://icfcs.kanagawa-u.ac.jp/>

利用案内

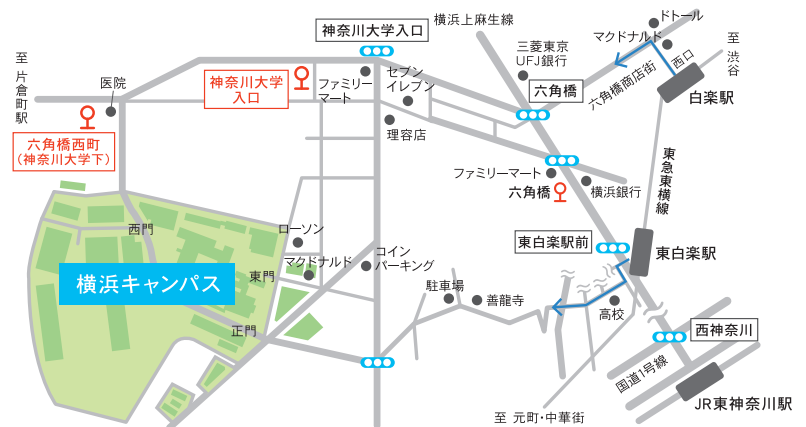
研究所の所蔵図書および所蔵資料は研究目的での閲覧利用ができますが、整理状況・閲覧席の都合等により、日程・利用内容等の事前調整をお願いしています。利用を希望される学外研究者の方は、事前の電話連絡をお願いします。TEL 045-481-5661(代)

- 利用時間———月曜日～金曜日 9:00～16:00
- 閉室日———土曜日、日曜日、国民の祝祭日、本学休校日及び夏季・冬季休暇期間など
※臨時に閉室する場合もございますので事前にご確認ください。
- 閲覧座席数———5席

- 所蔵図書の利用———
 - ・学内の方は、9号館1階の研究所内「閲覧カウンター」へ直接おこしください。
 - ・神奈川大学図書館OPAC(<http://ufinity.kanagawa-u.ac.jp/>)にて書誌検索ができます。
 - ・各文庫には利用の制限がありますので、あらかじめご了承ください。
- 所蔵資料の利用———
 - ・所蔵資料については「神奈川大学デジタルアーカイブ」にて資料リストを公開しています。
 - ただし、利用できる資料については研究所へお問い合わせください。

〈横浜キャンパスへのアクセス〉

- 東急東横線「白楽駅」または「東白楽駅」下車 徒歩13分
※駐車場がありませんので、自家用車の利用はご遠慮ください。
- 横浜駅西口バスターミナルから横浜市営バスを利用
 - ・1番乗場〈36系統〉 菅田町または緑車庫前行「神奈川大学入口」または「六角橋西町」下車
 - ・1番乗場〈82系統〉 八反橋または神大寺入口行「神奈川大学入口」または「六角橋西町」下車



学内マップ

非文字資料研究センター
(2階)



神奈川大学日本常民文化研究所

〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1 (神奈川大学横浜キャンパス9号館1階)

TEL 045-481-5661(大学代表) FAX 045-413-4151(直通)

<http://jominken.kanagawa-u.ac.jp/>

非文字資料研究センター <http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/> 国際常民文化研究機構 <http://icfcs.kanagawa-u.ac.jp/>

2018年7月

